

「大場先生ご定年に際して——贈る言葉」

榎 本 誠

大場先生のご定年に際し、何か思い出を書くようにとのことなので、長年お世話になった後輩同僚として、私の個人的な思い出を綴ることでご勘弁頂きたい。

大場恒明先生との出会いは、今から約十七年前に遡る。神奈川大学の平塚キャンパス開設準備として開設二年程前に、就任予定の外国語・一般教育担当教員への説明会・懇親会が確か横浜駅西口の東急ホテルで行われ、この時に大場先生はじめすでに退職された加藤二郎先生にも初めてお目にかかった。その当時は何を話したのかは定かではないが、エネルギーシユなお方という印象は今でも鮮明に残っている。

平成元年四月初めに新キャンパス竣工式が行われ、そのレセプションの場では親しくお話をさせて頂き、新たな学部での教育に意欲を燃やしておられたと記憶している。前任校の日本女子大に長らくお勤めであったと伺ったが、いきなり右手の小指を立てて、「これでクビになったの」と笑いながらおっしゃったのにはびっくりさせられた。詳しくその内容をここに披瀝する訳にはいかない

が、何事も明るく笑い飛ばされる豪快さは今でもお変わりがない。そのパーティーでのスナップ写真が今手元にあるが、私も含めてこの十五年間の風雪の厳しさが分かるような風貌の変化を実感せざるを得ない。皆確実に若かった。

研究室もお近くで、同じく外国語分野ということもあり、その後何かにつけて先生の研究室に立ち寄り、四方山話から始まってかなり深刻なご相談に至るまで、コーヒーを（たまにはアルコール飲料を）頂きながら話し込んだものであった。川越のご自宅のご家族と離れての単身赴任のせいとか、夜遅くまで話し込んで、真つ暗になったキャンパスの駐車場まで一緒にして、「ま、とにかく頑張ろうや!」というよく分からない結論でおわかれたのを思い出す。特に外国語グループとしては当時北澤先生（英語）、加藤二郎先生（ドイツ語）、野間先生（スペイン語）などの錚々たる長老（失礼）がおられ、私のような若輩者との繋ぎ役的な役割を自然と大場先生が果たされるような具合であった。私たちの勝手な構想

を楽しそうに聞いて下さり、折を見て長老方に必要な情報伝えて下さったようである。ともすれば個人主義に陥りがちな大学のような組織においては、肝胆相照らすかのような人間関係は日常的に必要である。従つてこのような潤滑油的な働きは極めて重要な役割であり、大場先生はご存じの通り人情味に溢れ、責任感強く、情熱的なお方であるが故に、果たされた役割も大きかったと実感している。

ご専門分野については言うまでもなく、アンドレ・ジッド研究をベースに日本文学との比較文学研究に長年従事され、精通されておられ、十八世紀のイギリス小説を専門分野としていた私にはとても近しく感じられ、先生の研究室の蔵書の中には私にも馴染みの比較文学関係の書籍も散見されて、余計に距離を感じなくなつていたのかもしれない。また、先生の好奇心は文学に止まらず、古今東西の映画にも及んでいることは、一度お伺いした鶴巻温泉の先生の庵に山ほど積まれた映画のビデオの本数からも十分理解できた。

庵といえば聞こえがよいが（失礼）、ご本人も「あばら屋だよ」と仰つておられたが、隠れ家と言えば、先生は以前からセントバーナード犬を広大な敷地のなかで飼うことを夢見ておられた。ブラックバス釣りに没頭され、ワゴン車に寝泊まりしながらよく河口湖へ通われていた

し、ボートからの釣りを可能にするために船舶免許まで取得されたほどの熱意をお持ちであつた。いずれにせよ、都会のような人工的な環境は、夜のネオン街以外は唾棄すべきものであり、荒々しい素朴な自然の中で活動することを好まれていた。

先生のこのような個人的、私的な事柄をお許しも得ずに暴露して良いものかと内心不安になるが、これも先生への感謝の表れとして、笑つて許して頂けるであろう。調子に乗つたついでにさらに暴露すれば、こうした先生の個人的な世界を知り得たのは、先生の研究室や平塚の飲み屋やカラオケバーで、泥酔寸前の極地の中、怒鳴り合うようにお互いの肩を叩きながら話し込んだ際の記憶である。酒と言えば、大場先生の武勇伝は数々聞かされていたが、ご想像通りどれも酒に酔つたうえでのものであり、恐らくご本人はよく覚えておられないのではないかと察せられる。しかし、その失敗談を語られる時の先生のご様子はとても楽しそうで、笑いが止まらないといった風に、他人事のように笑い飛ばしながら語られるので、聞かされる方も内容はどうであれ楽しく一緒に笑わせて頂けるのであつた。具体的にはとてもここに記す訳にはいかないが、（文字にするとんでもない行状と誤解されかねないからであるが）実際には実害のない失敗談であつた。

先生があこがれておられたのは、起承転結のはつきりとした明快な、予測可能な人生ではなく、まさしく口癖のように言われていた「逸脱」の人生であつた。逸脱の美学とでも言うのであろうか、ご自分でも自分の人生は「逸脱の人生なんだ」と語られていた。しかし、定年まで職責を全うされ、教育者として、研究者としての責任を果たされたことは、「逸脱」とは対極の人生であらう。但し、例によつて大場先生の個人的、私的な、情念の世界では大いに逸脱が行われたのかもしれないが、私には定かではない。ともあれ、ご苦勞様の言葉と同時に、「感謝」の二文字を何度差し上げてもし足りないくらいであることは確かである。大場先生、ありがとうございました。

Bon voyage!